

# 知的障がい者グループホームにおける居室サインのグラフィック制作

グラフィックデザインの抽象度の観点から

Sign Graphic Design in Group Home for People with Intellectual Disabilities • In Terms of the Level of Abstraction

星野純平<sup>1)</sup> 工藤真生<sup>2)</sup> 緒方克也<sup>3)</sup>

Hoshino Junpei<sup>1)</sup> Kudo Mao<sup>2)</sup> Ogata Katsuya<sup>3)</sup>

1) 九州大学大学院芸術工学府 2) 九州大学 3) 障害福祉サービス事業所 JOY 倶楽部

Abstract : The purpose of this research is to clarify the design condition of graphics for sign and research methodology including people with intellectual disabilities.

In this research, sign graphics pasted to the door in group home for people with intellectual disabilities were designed to distinguish their rooms easily. Ten adults with intellectual

Key Word : Graphic Design, Sign, Intellectual Disabilities

disabilities who cohabit in the group home were surveyed about their preferences for graphics on the door different in level of abstraction (concrete / semiabstract / abstract).

As a result, concrete was selected the most. The sign graphics were designed considering this result and harmony with the surrounding environment of living space.

## 1. 背景と目的

2002年5月ICF国際生活機能分類が採択され、障害の捉え方の要因に環境因子が新たに追加された。ここでは、個人の生活機能は環境因子や健康状態の相互関係によって決まることが示された<sup>1)</sup>。人の行動発達を規定する要因に「環境」がある<sup>2)</sup>ことから、人への環境の影響は大きい。また、Lenclos, J. P.、西川らは環境グラフィックの対象範囲は人間の身体から自然界全域に及ぶと捉えている<sup>3)</sup>。近年、インクルーシブデザインなどへの注目からも、デザインを人中心で捉える考え方が重視されている。サインは、人と環境を結び付けるためのデザインであり、先述の考えをデザインに取り入れていく必要がある。本研究では、知的障害を有する人が居住するグループホームにおいて、個人の居室を直截的にわかりやすくすることを目的として、各居室ドアに設置するサインのグラフィックデザインを制作、提案した。障害科学分野において、知的障害を有する人とのコミュニケーションで使用する視覚支援教材では、抽象形体より具象性の高いグラフィックの方が理解を促すことが示されている<sup>4)</sup>。特別支援学校におけるサインにおいても、形の抽象・象徴表現が難しいことが示されている<sup>5)</sup>。そこで本研究にあたり、サインにおけるグラフィックの抽象度の好みに着目し、調査を行った。

## 2. 方法

**対象者**：成人知的障害者10名（男性5名、女性5名）、知的障害に重複する障害として、自閉スペクトラム症、ダウン症候群、ソトス症候群を有する。

**対象施設**：対象者が居住するグループホームA（2階建て、1階床面積117.50m<sup>2</sup>、2階床面積120.53m<sup>2</sup>、延床面積242.99m<sup>2</sup>）

**事前準備**：調査を実施する前に、グループホームの見学、障害福祉施設の見学に伴い、グループホームの居住者3名と簡単な会話をした。また、福祉施設の施設長に調査内容や言葉遣いに関してご教授をいただいた（表1）。

**調査方法**：最初に対象者が好きな(1)モチーフ(2)グラフィックの抽象度について聞き取り調査を行った。次に、調査の結果をもとに10枚のグラフィックを制作、各居室ドアに仮設置し、(3)デザインの5段階印象評価を実施した。

### 2-1. 調査

#### (1) モチーフの好みについて

調査実施日：2021年10月25日～11月4日。対象者は初め

表1 知的障害を有する人とのコミュニケーションにおいて気をつけたことの例

1. レポートの形成
<ul style="list-style-type: none"> <li>相手の行動を褒めながら話を進める。</li> <li>「あなたは…」ではなく「○○さんは…」のように名前で呼ぶ。</li> <li>テストではなく相手のことが知りたいという姿勢を示す。</li> <li>絶対に傷つかないことを丁寧に説明する。</li> </ul>
2. 理解が困難な言葉遣いの言い換え
<ul style="list-style-type: none"> <li>毎日・左右など、時間や空間の比較を含む言語表現を避ける。</li> <li>敬語表現を避ける。(例：「仰った」→「言ってくれた」のように言い換える。)</li> </ul>
3. 対象者個々に合わせた柔軟なコミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>声のボリューム (例：対象者の聴力や話し声に合わせる)</li> <li>話す速さ (例：対象者の理解力や話すスピードに合わせる)</li> <li>質問の形式 (例：口頭での自由回答/絵カードの選択回答)</li> <li>調査協力の同意方法 (例：署名/「協力します」or「協力しません」の指差し)</li> <li>対象者が話しやすい場所の選択 (例：共用リビング/談話室/居室)</li> <li>対象者が信頼を置く人の同席 (例：グループホームの支援員)</li> <li>従事内容に沿った質問</li> </ul>

に、好みのモチーフ（動物・果物・野菜・楽器/画材）について口頭または、絵カード（12×18cm）への指差しで回答した。次に、回答したモチーフの中から、「居室ドアに表示されていると嬉しいもの」を、指差しで選択した。

#### (2) グラフィックデザインの抽象度の好みについて

調査実施日：2021年11月8日～11月15日。(1)で選択したモチーフ別に、抽象度が異なるグラフィック3つ（具象・半抽象・抽象）全9種を制作した（図1）。グラフィックを印刷したシート（80×19.5cm）を各居室ドアに配し、対象者は「居室ドアに表示されているといつも見たいもの」を、指差しで回答した。グラフィックはランダム配置し、同じ内容を3回質問した。

#### (3) グラフィックデザインの5段階印象評価

調査実施日：2022年1月3日、4日、7日、13日計4日。先行事例<sup>6)</sup>や研究<sup>7)</sup>を踏まえ、「数字」・「言葉」・「表情」・「動作」の4つの評価要素を含む5段階評価スケール（21×29.7cm）を制作した。対象者は、仮設置されたグラフィックの前で、評価スケールの指差しで印象を回答した。1名につき3回実施した。



図1 抽象度の好みについての刺激例

記 対象者10名の好みのモチーフを用いて作成した抽象度別（具象・半抽象・抽象）のグラフィック。なお、2名が同一のモチーフ（ドラム）を選択したため、上記の通り全9種とした。



図2 グラフィック仮設置の様子：グループホームA、1階

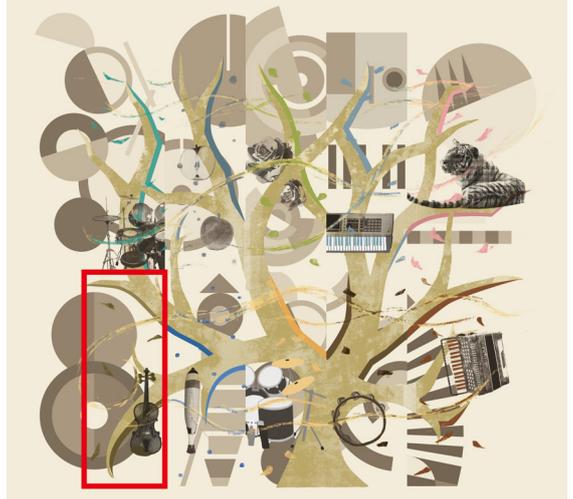


図3 制作したグラフィック：赤枠が1部屋のグラフィック

## 2-2. 制作

調査(1)・(2)の結果をもとに10枚のグラフィック(80×30cm)を制作、各居室ドアに仮設置した(図2)。

## 3. 結果

従事内容が音楽の対象者8名中7名から楽器のモチーフが選ばれた。サインにおけるグラフィックの抽象度の好みは、具象63%、半抽象33%、抽象3%となり、具象が最も多く選ばれた。この調査結果と周辺環境との調和を考慮し、10枚で一つの絵となるグラフィックをデザインした(図3)。グラフィックデザインの5段階印象評価は10名中8名から、高評価を得ることができた。

## 4. 考察

普段の従事内容が音楽の対象者8名中7名から楽器のモチーフが選ばれたことや、サインにおけるグラフィックの抽象度の好みにおいて具象が63%と最も多く選ばれたことから、普段よく目にしてはいるかどうか、理解のしやすさが選択に関わることが考えられた。提案デザインでは調査結果に加えて、周辺環境との調和、教育的観点等を踏まえてグラフィックを制作した。居室ドアの色に溶け込むような色彩と、彩度を落とした写真を採用し、抽象形体のグラフィックへの気づきを促すという観点から、背景にモチーフの抽象形体を混合した。また、知的障害を有する人を対象とした調査では、意思をできるだけ正確に読み取るために、同じ質問を複数回実施することが必要である。何度も対象施設に足を運ぶうちに、グラフィックについて対象者側から徐々に意見や提案をするようになったことから、長期的な信頼関係の有無によって汲み取ることのできる情報量が大きく変わることがわかった。

## 5. デザインの実装

仮設置したグラフィックについて、「モチーフの被りが嫌なので変えて欲しい」「寂しい感じがするのでもう少しモチーフに色が欲しい」など対象者との対話から汲み取った意見を踏まえ、2022年4月にグラフィックデザインの最終調整を行い、5月に竣工を予定している。

## 研究倫理

本研究は、九州大学芸術工学研究院実験倫理審査の承認を得て行われました(承認番号448)。

## 謝辞

調査にご参加いただいた10名のグループホーム居住者の皆様、制作にご理解をいただき、調査の際にご助力いただいたグループホームの支援員の皆様に心より御礼申し上げます。

## 参考引用文献

- 1) ICF 国際生活機能分類—国際障害分類改訂版—, 世界保健機関 (WHO)
- 2) 心理学 [第5版 補訂版], 鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃・河内十郎・編, pp47-pp51, 2020, 東京大学出版会
- 3) 高台泳 (2006) 「環境グラフィック」の概念的理解: デザイン学研究, Vol.53, No.3, 11-20
- 4) 松下浩之 (2018) 知的障害や自閉症スペクトラム障害のある人に対する視覚刺激を用いた支援の効果-教材作成における課題と活用可能性- : 山梨障害児教育学研究紀要, Vol.12, 117-126
- 5) 工藤真生, 山本早里 (2013) 国内特別支援学校における視覚的支援としてのサインの傾向: デザイン学研究, Vol.60, No.1, 87-94
- 6) 筑波大学 特別支援教育 教材・指導法データベース「気持ちチェックシート」 <http://gakko.rdy.jp/kdb/search/kyozai/detail/79> (最終アクセス日 2022年4月8日)
- 7) Senju, A., Johnson, M.H. (2009) Atypical eye contact in autism: Models, mechanisms and development. *Neuroscience and Biobehavioral Reviews*, 33, 1204-1214.